



Title	日本農耕具史の基礎的研究
Author(s)	河野, 通明
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38338
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名 河野通明

博士の専攻分野の名称 博士(文学)

学位記番号 第10348号

学位授与年月日 平成4年6月10日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文名 日本農耕具史の基礎的研究

論文審査委員 (主査) 教授 脇田修

(副査) 教授 都出比呂志 助教授 平雅行

論文内容の要旨

本論文は、日本における農具のなかでも、とくに馬鍬・犁の農耕用具についての歴史を研究したものであって、5部・11章からなり、本文400字・1134枚、多くの図表を含む大作である。

序章は「日本農耕具史研究の課題と方法」と題して、本論文は日本の農業生産力の展開を具体的に分析するため、農具とくに耕起具を対象に取り組むとしている。そして従来の研究は文献史料に偏りがちであったのに対して、物そのものを通じて見ていくとし、考古資料、絵画資料、民具などを用いて分析したいと述べている。

第一部「馬鍬の伝来と展開」では、まず第1章「馬鍬の導入—古墳時代の日本と江南」として、その伝来と展開を検討する。まず馬鍬の呼称はウマクハからマンカ・マングワと呼ばれてきたが、これは犁(カラスキ)がウシクハ・ウシンガといわれるよう、牽引する馬と牛によって名づけられたものとする。

さて出土馬鍬を検討すると、奈良時代以前には14遺跡・21例で、犁の3遺跡・3例と明らかな対照をなしている。このように馬鍬は6世紀から見られ、全国的に分布し、内容も多様であるとする。そして5世紀から乗馬の風習が見られるが、それとほぼ同時に馬鍬が普及したこと、一般に日本での東西文化比較のなかで東の馬・西の牛とされるが、牛の普及は時期的にも遅れたと見ている。

アジアでは広く馬鍬がおこなわれているが、インドからインドネシアにかけては2頭引きであり、東南アジアから中国・朝鮮・日本は1頭引きである。後者には鳥居形の把手がついているところから、日本の馬鍬の原郷は中国江南地方であり、倭の五王時代における交流のなかで、中国から他の碎土・代かき農具とともに入ってきたと推定する。そして中国では水牛に引かせていたが、水牛のいない日本では馬を使ったとする。

ついで日本に入った馬鍬の展開について、9世紀後期・10世紀初頭に木製歯から鉄製歯への移行がなされ、11世紀ころには馬にかわって牛の使用もなされたことを明らかにしている。

「近世における馬鍬の展開」とする第2章では、近世農書の記述をふまえて、馬鍬の呼称と漢字表記について検討し、紀伊の「かいくわ」を除き、ほとんど馬鍬系統の呼称であることを述べている。ついで馬鍬の発展を検討して、(1) 17世紀には歯は軟鉄とともに刃金化が見られる。(2) 17世紀後半、歯数や歯長の異なる馬鍬の使い分けが

なされた。(3) 17世紀後半から水田用定型馬鍬が裏作などの乾地に使用された。(4) 歯減らし馬鍬の出現。(5) 乾地用の薙刀歯の開発。(6) 敵立て専用の馬鍬の開発。(7) 19世紀には畑作専用馬鍬の開発、などの特色が見られたとする。それは近世における商品作物の盛行などを背景に、乾田化の進行や畑作地開墾、二毛作の広がりなどをうけているが、前期には水田用定型馬鍬の畑作への転用、中期には部分的改良が進み、後期には畑作専用馬鍬が開発され、近代にかけて飛躍的発展を遂げたとまとめている。

第二部「牽引具より見た犁耕の伝来と受容」では、犁の資料が少ないため、むしろ牽引具から迫るとして、「オナグラ・ウナグラ」と呼ばれる牛にかける首木の研究を、第3章・第4章においておこなっている。この語源は、うなじ+くら→ウナグラであり、そこからオナグラに転化したものとする。

これらの牽引具は、現在、アジアでは朝鮮半島と紀伊半島にのみ見られるが、紀伊では2類型のあることを明らかにする。また藤原宮出土の首木について、それが荷車用ではなく農耕用であることを論証している。そして朝鮮において使用されている器具との類似性から、その源流は朝鮮であり、古墳時代に伝えられたと推定する。

ついで周防に残るウナグラの分析を通じて、それが紀伊のウナグラよりもはるかに曲りが強く、首かせ棒の付かない首木や引綱の稜線渡しといった特色から、中国系のもので秦氏の伝えたものと推定している。

第5章「小鞍の開発—日本的牽引法の形成過程」では、首引きとともに、小鞍と呼ばれる牛の背中の鞍から牽引する胴引き法があり、それは日本独特のものである。この小鞍の使用により耕作深度は多少浅くなるが、牽引点を首と胴の2か所にわけるため、首への負担を軽減する効用がある。そして平安時代に畿内近国において牝牛の利用が広がるなかで、開発された新技術であると指摘する。

小鞍の形態については単橋と双橋があり、また千木枠・山枠があることを明らかにしている。そして絵画資料を分析した結果、大部分が山枠双橋鞍で、畿内では平安時代後期に遡りうるが、千木枠双橋鞍は1例しかなく、この普及は畿内でも江戸後期としている。なお考古学出土品は数例しかないが、なかでも平城宮跡出土の「輶」は、若枝の段階で固定して製作した鞍であることを指摘する。これは単橋鞍であるが、鎌倉期の六道絵の描写とあわせて、単橋鞍の存在を明らかにしている。双橋鞍については、単橋鞍に小さな後枠をつけたものもあるが、前後同じ大きさの双橋鞍が基本である。そもそもともと荷鞍や馬鍬を引くのに山枠双橋鞍をつけていたところから、牛が犁を引くのに山枠双橋の小鞍を使用するようになったと見ている。

第三部「犁耕資料の基礎的研究」では、第6章・第7章において、古代犁耕の基本資料とされていた3点について検討している。まず島根県匹見町出土の犁先は、すでに室町から江戸時代の犁先であることが明らかとなっている。残る2点についても長い研究史があるが、その資料操作から立論にいたるまで丹念な検討を加えた上で、正倉院の子日手辛鋤は中国のそれを忠実に模作した鋤であることを論証した。ついで絵因果経の牛耕図を調べて、中国の原本を模写したものとする。したがって、これらは犁の資料とはできないが、日本の鋤の源流としての中国の農具研究に利用できることを示している。

第四部・第8章「御田植神事の模型犁」では、大阪市平野区の杭全神社、京都府日吉町の多治神社、奈良市の春日神社・手向山八幡宮、大和郡山市の植槻八幡神社の各社に、近世において奉納された模型犁を検討している。そしてこれらの犁は近年の民具と変わらないが、地域差があり、近世後期に属する後2者には耕作深度調整装置が見られるから、そこでは調整幅が大きくなるようなゆるやかな進歩が見られるとする。

ついで第9章「長床犁の形と性能についての基礎的考察」として、長床犁は長大な犁床をもつため耕作深度が浅く、近世以降では鍬に圧倒されるという通説について検討している。まずこれは直進方向の安定性があり、とくに前後方向の安定性が高く、重心が低く後方にあって前のめりがなく転ばないなどの特徴のあることを、重量・仰角・刃先・把手などを分析して明確にする。ついで耕起と摩擦によって起こる抵抗をあわせた「牽引抵抗」を実験によって検討する。長床犁は重量が重いため摩擦抵抗は大きく、無床犁・近代短床犁の摩擦抵抗は小さいとするが、それは重量には比例せず、重量の差の半分位であり、かえって安定性を保つために操縦者が把手にかける外力は、後者の方が大きい。また耕作深度は確かに浅いが、従来考えられているほどではなく、それは子牛にひかせるため馬との牽引力に差がでたこと、耕転の幅が大きいため耕起抵抗が増加するので、深度を浅く抑える結果となった、そして近代短床犁の

改良によって、耕作深度に差がでたとする。

また長床犁は水田の水漏れを防ぐ「床締め」の機能があるという定説については、実験などの成果にもとづいて、これを否定し、「床締め」には水田を牛と人が歩くことによる効果が大きいとする。そして水漏れがなくなるのは、水を張った田を犁で「代犁き」することによって、細かい土の粒子ができ、それが地中の隙間を埋めて漏水を止めるためだとしている。

ついで長床犁が畝立てに適さないとする通説についても検討し、1920年代の競技会での状況や、現在の聞き取りによって、畝の畝立てには長床犁がすぐれていることを論じている。

かくして本章では長床犁の主要な機能について考察をし、従来の否定的な評価に対して、実証的な批判を加え、その見直しを求めている。

第五部は「鍬・鋤についての基礎的考察」と題している。まず第10章「角先鍬の成立」は、考古学の成果によって、それが戦国時代の築城・攻城の土木用具として開発され、それが農村に普及したものとしている。つぎに第11章で和泉の和氣遺跡出土「犁」について考察し、それが犁ではないこと、ナラシ系の道具、また炭焼き用具の「灰やり」あるいはスケイ系の道具などの木製の用具との関連で考えてみることを提案している。

論文審査の結果の要旨

日本農耕具の歴史については、従来、古島敏雄氏などの業績があるが、歴史学の研究としては文献史料中心の分析であり、また器具そのものに即した研究も農学や民俗学の立場からおこなわれているが、それも不十分であった。本論文は、民具の研究から始めた論者が、本来の民俗学的研究による現物とその使用方法の調査をおこない、さらに最近の歴史的研究の発展をふまえて、文献史料はもとより、考古学の成果や絵画資料などを駆使して、農具の発展と機能を明らかにした労作である。

これによって馬鍬については、その伝来から展開にいたる歴史が明らかとなった。馬鍬が中国江南から他の農耕具とともに導入されたことや、延喜式における旧品の返上規定から鉄製歯の馬鍬が存在すること、また津守国基の歌から牛耕への転換を指摘するなど、随所に創見があり、また近世農書によって、馬鍬の改良や畑作専用馬鍬の成立などを明らかにしたのは、すぐれた功績である。

牽引具としての首木・小鞍についても、その伝来と展開を詳細に分析をおこなっているが、これは従来ほとんど研究がなされていない分野を開拓した重要な成果であって、今後の研究における基礎的文献となるであろう。

犁については、従来、基本資料とされた正倉院日手辛鋤・絵因果経の牛耕図が、いずれも中国の鋤・犁を写したものであることを明確に論証している。

また長床犁については、神事に使用する模型犁を使用することで近代犁との関係を明らかにし、さらに長床犁は耕作深度が浅いため、近世では深耕可能な短床犁や鍬が発展したとする通説を検討して、それが耕作深度の差も少なく、安定性の点から評価すべきことを述べ、牽引力の問題も取り入れて詳細に分析している。また犁を使用した代犁きの機能によって水田の水漏れを防ぐこと、畝の畝立てに有効であるとの指摘をしている。ここでは耕作深度のみに偏っていた評価に対して、長床犁の実験をおこなうなど具体的多面的に分析し、通説を批判している。従来、長床犁の日本農耕への適応能力については、否定的見解が強かったが、本論文によって旧説が批判され、長床犁の優れた性能が証明されたと考える。

また鍬・鋤についての研究は、今後の問題としているものの、角先鍬の分析は、土木工具から農具への影響として、その成立を明らかにしたもので、戦国時代における用具の発展を城郭建築における技術の側面から考察する新しい視点を示しており、すぐれた成果である。

このように本論文は、日本農耕具における馬鍬・犁と牽引具の発達史について、実証的に検討を加えたものである。鍬・鋤というもっとも普遍的な農具についての研究は緒についたばかりであるが、同じく主要な農具である馬鍬・長

床犁などについての本格的研究をおこない、従来の農具研究の水準を大きくこえる成果を提出した。また方法的にも文献史料のみによらず、民具、考古資料、絵画資料などあらゆる資料によって実体に迫ろうとし、また器具の形態と計測、使用実験などを通じて、通説を再検討して、多くの新知見を加えている。

もちろん民具資料を文献史料や考古資料と有機的に結び付けて考察する際、農具の源流や系譜関係の推論過程において、なお多くの資料によって確定する作業が望まれる部分も散見する。

しかし本論文は、日本の農具発達史に関する通説の枠組そのものを検討し、新たな体系を提示する野心的な業績であることは明らかであり、博士の学位にふさわしいものと考える。